
論説

クオンデのファン・チュウ・チン宛 書簡と「サンテ監獄事件」

——東遊運動崩壊後のクオンデの
思想と行動（1）——

宮 沢 千 尋

はじめに

本稿は、東遊運動崩壊後のクオンデの思想と行動を解明する目的の一環として、欧州滞在期、とりわけフランス亡命中のファン・チュウ・チン (Phan Chu Trinh) との関係を中心に扱う。日本政府の圧力により、クオンデとファン・ボイ・チャウ (Phan Bội Châu) はそれぞれ個別に日本から退去を余儀なくされた。その後、クオンデは香港や広東、シャムなどを転々としながら救国の途を探ったが思うような結果は得られず、1913年9月からは欧州に活動の拠点を求めようとする。

特にフランスに敵対するドイツに期待をかけ、ベルリンに滞在してドイツ政府に援助を求めようと模索する。しかし同時に、フランス亡命中のファン・チュウ・チンにフランス政府やフランス人への仲介を依頼する手紙を出した。チンはこの手紙をクオンデの従者から受け取ると、直ちにフランス政府に引き渡してしまう。対独戦争の開始が近いことを自覚していたフランス政府は、クオンデがドイツに滞在していることに衝撃を受けると同時に、チンにドイツへの通牒者との嫌疑をかけ、在仏ベトナム人社会でのチンの動向を探り、結局チンは、第一次世界大戦勃発後の1914年9月14日に逮捕され、1915年7月16日までサンテ監獄に収監される。クオン

デの手紙が、チンの逮捕の契機となってしまったのである。

この事件に関しては、在仏ベトナム人のトゥー・チャンが在仏期のチンの研究で言及している (Thu Trang 1983) ほか、オーストラリア在住のチャン・ミィ・ヴァンがクオンデの伝記のなかで扱っている程度である (Trần Mỹ Vân 2005)。一方、ベトナム本国では、チンの外孫で元外交官のレー・ティ・キン (Lê Thị Kinh) によるフランス海外領土省資料館所蔵のチン関係資料の翻訳がおこなわれ (Lê 2001; 2003), さらにチンの全集が出版されるなど従来目に触れにくかった資料の利用が可能になっている。これらの翻訳資料と、筆者が2004年に海外領土省資料館で収集した資料を基に、事件の全貌、在仏ベトナム人社会の様子とフランスの捜査の実態、独立達成のための方策に苦悩するクオンデの姿を明らかにしたい。ヴァンが指摘するように、欧州での挫折はクオンデを再び日本へと向かわせる一因¹⁾になっており、クオンデ、チンという日本にも縁浅からぬベトナム民族主義者の思想と行動を日本語読者に読みやすい形で提供することに意義があると考える。また、本稿ではそのベトナム語への翻訳を含めて、フランス植民地期のアーカイブズ資料を多く紹介したい。

1. チンのフランスでの境遇とクオンデの訪欧

周知のとおり、チンは1908年の中部抗税一揆を扇動したとして死刑判決を受けたが、バビュ (Babut) らベトナム人権会の運動によって減刑されコンダオ島に流刑された後、さらに恩赦を受けて出獄し、1911年にフランスに渡った。フランス植民地省とインドシナ政庁は、チンの在仏中に彼を取り込もうとしたが、チンはこれを拒否して、ベトナムからフランスに留学してくる学生たちに愛国精神教育を広めていった。1912年2月には弁護士ファン・ヴァン・チュオン (Phan Văn Trường)²⁾と同胞親愛会を結成し、人権連盟を通じて囚人問題を上訴した。またベトナム国内の

人士、コンダオ島に収監されている囚人、中国で活動しているベトナム人とも連絡を取り合っていた (Lê 2001 : 54-55) という。

一方、クオンデは日仏協約により、1909年11月1日門司港から伊予丸にて上海に出発、日本を退去した。その後、香港、上海、シンガポール、シャム、広東などを転々としながら、辛亥革命後の孫文や黄興、陳其美、胡漢民などに、辛亥革命の勢いでフランス打倒への協力を要請するが満足な結果は得られず、活動拠点を欧州に求めようとした。また渡欧前に、活動資金集めのため短期間ベトナム南部に潜入した (Cường Đê 1957 : 35-81)。

インドシナ総督アルベール・サロー (Sarraut, Albert) はチンを危険人物として見ていた。サローは1913年4月に植民地大臣にチンと香港のベトナム人革命家との関係に関する手紙を送っている。その23日後の1913年4月26日、ハノイでサロー暗殺未遂事件が起きた。その直前にサローが植民地大臣に書いた手紙に、当時のベトナム独立運動に対するフランスの見解が記されている。

史料1 香港のベトナム革命勢力とファンの連携に関するサローインドシナ総督の疑義³⁾

ハノイ 1913年4月3日

インドシナ総督

植民地大臣殿 (大臣事務室) パリ

在香港パリ領事の秘密要員は、中圻及び南圻出身のアンナン人の名簿の中で、イギリス割譲地在住のアンナンの反乱分子との関連を報告していますが、私は儒者ファン・チュウ・チン—1908年にコンダオ島に収監され、1910年にクロブコースキー (Klobukowski, Anthoni-Wladislas) 総督によって恩赦を与えられ、渡仏して現在もそこにいる一の名があることに注目しています。このアンナン人の具体的な住所

「アサス通り 87 番地メロン婦人宅」は、本国の派遣要員が正確に作った通信により確認されています

我々は、ファン・チュウ・チンが国外に送った手紙の内容を知るところを、とても必要としています。また私は、閣下に障害が無ければ、このアンナン人の必要な調査を厳密に行い、この事件を明らかにすることを要請いたします。

サロー

サローは、自らを狙った暗殺事件とチンとの関係を疑っていた。また、パリの『ル・ジャーナル (Le Journal)』紙は、サローを狙った爆弾事件に注目して、1913年5月3日号において、チンへのインタビューを掲載した。チンは事件についてこう述べている。

史料2 『ル・ジャーナル』紙によるチンへのインタビュー⁴⁾

(前略) 急告を告げる痛ましい事件を私は事前に予見していました。植民地大臣メシミ (Messimy) 閣下とインドシナ総督サロー氏にお目にかかった際、私は同胞の苦しみを告げたのです。(フランスが) アンナンの民が約束された改革を享受できなければ、どんなことでも起こり得る。その時から現在まで 20 ヶ月、フランス人は、鞭で打たれた子供に菓子をやるとような些細な 2 つのことしかしませんでした。

(フランスの) 酒の専売権⁵⁾は廃止すると宣言された後に、うやうやしくも取り下げられるでしょう。コンダオ島 (の監獄) に収監されている愛国者たちは恩赦の約束があったというのに、相変わらず痛苦呻吟しています。私たちが要求した教育は拒否され、私たちが苦しんでいる侮蔑は撒き散らされ続け、古い過ちに新しい過ちが付け加えられ、神聖な嗣徳帝の墓までも宝を探すために掘りかえされています⁶⁾。それら全てのことに民衆が何を考えていると思いたいのでしょうか? (中略) 私は、私が書いた憂慮の手紙をフランス政府が受け取ったことを知っています。

その20日後にハノイで爆弾が爆発したのです。

現在、人々はアンナンの国でテロリズムの制度を施行することが必要だと言っています。言うのは簡単です。500人、1000人が逮捕され、斬首されるでしょう。その後はどうなるのでしょうか？ フランス人は（ベトナム人の）怒りをあおるだけです（中略）。アンナンの民は勉強したいのです、尊重されたいのです、酒をこれ以上喉に流し込まれたくないのです、解放されたいのです。

この点から、あなたは、仏国が我々アンナンの民に同感する時、利益があるとお思いですか？ いま、アンナンの民を、フランスが開化し、当然の自治権を交付し、私たちに、私たちのための自由を交付する準備をしたら、私たちは国の全ての権利を維持し、フランスの友人となり、同盟国となるでしょう。

あなたたちの利害は、あなたたちに義務をあたえます。あなたたちは、アンナン人が享受する何物をも与え、彼らが要求する改革を与えなければなりません。酒の専売権、阿片を使用することの完全な禁止⁷⁾、教育の自由、政治・司法制度の確立、拘束されている者の釈放、裁判にかけられている者への恩赦、極限まで軽蔑されている土着の民に対して新たな態度を取ることなどです（中略）。

私はフランスを愛しています。私は、仏国が平等の名声を維持することを熱烈に希望しています。またわが国に対し、フランスが公共の利益と私的利益を共に掲げ、我々に必要な改革を実現すれば、全ての面で利益を見ることができるのです。

たぶんフランス政府は、急ぐ必要はなく、深刻なことは何もないと感じているでしょう。私の意見は逆です。私はフランスをとっても愛しています。ですから、あなたに言うのです。愛している人には事実を言わなければなりません（後略）。

フェルナン・ハウサー記者

ここには真正面から、ベトナムの独立をフランスに要求するチンの態度がある。チンはこのように言論でベトナムの植民地解放を目指しており、チンはベトナム史上で「改良主義者」として評価されてきた。しかしそのチンが、クオンデと共謀し、ドイツの力を借りてフランスに対し、武装蜂起を企てていると、フランス側は判断するのである。

一方、クオンデはベルリンから、フランスにいるファン・チュウ・チンに手紙を書き、秘書であるチュオン・ズイ・トアン (Trương Duy Toàn または Toàn)⁸⁾に持たせてパリまで行かせた。ところが、チンはその手紙をフランス植民地省に提出してしまう。その1913年9月4日付けのクオンデの手紙は、ドイツとの戦争を予期していたフランス当局を震撼させる。

それではクオンデのチン宛の手紙はどのようなものであったのか。現物はエクサン・プロヴァンスの仏海外領土省に保存されている。手書きなので判読不可能なところもあるが、以下に拙訳を示す。

史料3 クオンデからファン・チュウ・チンへの書簡⁹⁾

西湖¹⁰⁾先生。

出国してから現在まで、(革命)運動を鼓吹しに行くと言っても、早口で言ったり、ゆっくりと言ったり一貫しませんでした。私の仕事も、国民の程度が低すぎることで、お金が無ければどうしてできようかということを知りました。ですから知識が開通し、人材を養成し、15年、20年後に国の内外に人が育ち、そのときやっと(革命)事業ができるのです。ですから、この長い間、どんなに危険で辛く苦しかろうとも志を達成させるために、心を堅く守ってきたのです。この2年の間、中国革命が成功したことは疑いも無く、私は不屈十年の如く、考えに考えてきましたが、中国の手に従うことを辞めなければ、中国から離れることはできません。わが民の程度を問えば中国に劣り、わが国体は孤立無助で、彼らの凄惨さに対し国を守ることもできません(以下数字意味不明)。

中国のためにわが国は何も失わないといっても、わが国中の利権を彼らは接収しつつし、況や国権は彼らの手にあり、中国の民は数が多いが、わが国は少なく、その民は団結しているが、わが民は散逸し、その民には資本があるが、わが民は困窮し、その民は忍耐強く勤勉であるが、わが民は(2字意味不明)騎っており、その民が剣を取らず、銃を取らず、わが民を殺さなくても、何事も全て彼らに負けています。わが民が戦って(2字意味不明)、彼らは餓死・凍死し、だんだんと滅んでいくのです。

現在、わが国の状況を見ると、独立しておらず、(3字意味不明)、友邦が漁夫の利を得るのです。最近のフィリピン¹¹⁾の例を見ると、民に少しも利が無く、民に災いを加えています。私はパリ政府に保護を取り消すことを請う手紙を送りたいのですが、ランサン国が自治植民地になったということを聞いて、幸運に思います。わが民なら同じく法律的不平等を、多分より良く享受できるでしょう。先生は徳と優を兼ね備えた人士であられるし、パリに長いので多くの人と交友して知己も多いでしょう。先生もこのことを行うか否かについて決まった意見をお持ちでしょうから、早速にも私が算段するためにお教えいただきたい。

長いこと、私はこの事業に意志を強くして関わってきましたが、満足は得られませんでした。兄弟、同志、国民全体とともに、深夜を騒がすようなことを更に行ってきましたが、慙愧の痛みはどれほどか知りません。しかしわが国体と人心は、どうすれば兄弟たちも私に良い場所を用意してくれることができるでしょうか。

この(手紙を持ってきた)人物は、チュオン・ズイ・トアンという名で、国内で日刊『六省新聞』の主筆をしていましたが、私が(海外に)行く機会に連れてきたばかりです。

先生がお帰りになることを願ってやみません。

感恩

先生と「同胞親愛会」の兄弟たちに常に健康が訪れますように

謹書

クオンデ

押印

クオンデはこの段階では、ベトナムの独立が不可能なのは、民の程度が低いことと、資金がないことにその理由を求めている。民の程度はクオンデが目指す論点であった。しかしこの愚民感が、ロシア革命やベルサイユ会議によって払拭されていくことは拙稿（宮沢 2005）で詳しく述べた。その後の彼の主張は、「民族自決」に移っていく。

しかし何より目を引くのは、辛亥革命に成功し、ベトナム独立運動のモデルとして見ても良いはずである中国に対する強い警戒感である。

前述のように、クオンデは、辛亥革命後、孫文や黄興、陳其美にベトナム独立運動への援助を乞いに行ったと伝記に記している。しかし同胞であるチンには、中国と手を切らなければ、中国に飲み込まれてしまうという危機感を吐露する。後述するように、中国に占領されるなら、フランスと手を組んでも良いとさえクオンデは言うのだ。歴代中国王朝に侵略されてきたベトナムの王族の意識は一筋縄ではいかないということであり、ヴァン（Trần Mỹ Vân 2005:88）が述べるように、独立のためには利用できる相手を選ばないクオンデのプラグマティズムのなせる業である（しかしこのような態度は、何もクオンデ一人に限ったことではなく、ベトナム民族主義者には多かれ少なかれ同様の傾向があると筆者は考える。この点については後述）。

一方、フランス当局はドイツとクオンデの関係を疑い、トアンの動向を調査し始めた。1913年10月6日付けの秘密電報によれば（この秘密電報は発信者と受信者がだれか記載がない）、植民地省がインドシナ総督に送った1913年10月23日付けの書簡で、植民地省がこの資料に基づいて、1913年10月10日頃、インドシナ総督に対し、トアンについて報告をお

こなったことがわかる。

史料4 秘密電報「チュン・ズイ・トアン、パリに到着」¹²⁾

1913年10月6日

一人の南圻人チュオン・ズイ・トアンという名前の者がピエール・シャソン通りの3番に住んでおり、『六省新聞』の旧編集人だと称してパリ在住の同胞に話しかけたり、学生を援助している。

この者は、革命と、ひとつの重要な任務—フランス政府に、アンナンと交わした条約の見直しを承認するよう要求する—を実現する—と言っている。そして、もしその目的が達成されたら、革命活動は終わるだろうとも。

この者はその同胞に対して、組織についての詳細、スパイ活動、ハイフォンにおける逆スパイ活動、革命活動、爆弾製造の仕方や投擲の仕方を詳細に話している。ある時はアンナン語で、ある時はフランス語で、詳細が真実か、そうでないかが詳らかでない多くの情報をもたらしている。

この者は、政府が香港に送った北部人の手先13人が逮捕され、アンナン人も爆弾を製造して香港で逮捕されたと言っている。フランス政府はイギリス当局と協議して、退去させられた犯人を上海に護送した。上陸するとき、これらの者がフランス租界を横切るときに逮捕することが出来るはずだった。しかしミスがあって、実行直前に失敗した。

トアンは革命家の運動計画や、雲南府のドイツ機関からたやすく援助を得られると説明している。この者は、北圻や南圻で、多くの爆弾事件起こるであろうと考えている。6年前に寄付した者たちの信頼を強くするため、総督府のような機関で爆発させないといけない。この者は、ハノイとタイビンで違う人物によって2件の爆破事件があったと言うが、(投擲した者の)名前は言わない。また、香港からドイツの客船で行く

と厚遇をうけることができると、モンマルトルのカフェでアンナン人に公然と話している。

チュオン・ズイ・トアンは、ファン・チュウ・チンと関係のある学生グループに属していない。学生たちはトアンが言ったことを信じていないように振る舞い、彼は気がふれているか、同胞の金を掠め取る方法を考えている詐欺師だと考えている。困って、学生たちには、同郷での秘密の企みを望む革命団のために活動している者とは見られておらず、フランス人に情報提供をするか、単にフランスの密偵機関のために働く者しか見られていない。アンナン人の学生たちは、近いうちにハノイで爆弾事件が起こり、(自分たちが)パリでフランスの密偵にいつも見張られていると考えている。

署名なし

このように、チンの組織した学生グループと、クオンデの使者トアンの間には、この時点で信頼関係が築かれていなかった。

一方、植民地省からインドシナ総督府に対し、チンがクオンデの手紙を持参してきたことが報告されていた。

史料5 植民地省からサロー宛¹³⁾

1913年10月23日

植民地省

インドシナ総督宛

10日前にチュオン・ズイ・トアンに関しての通告があった。ファン・チュウ・チンはゲスデ (Guesde, Pierre)¹⁴⁾氏のところへ、かつて『六省新聞』の主筆であった自称チュオン・ズイ・トアンなる者を連れて来た。トアンは2つの資料を持ってきた。

1. クオンデがファン・チュウ・チンに宛てた手紙で、その中では、中国がアンナンを占領するのを恐れる、彼はアンナン国を完全にフランスの

領土とするために、フランス政府に対し、一定の改革と北圻と中圻での保護制度廃止を要求し、フランスで広い人間関係を持っているファン・チュウ・チンの意見を聞いたがっている。

2. クオンデは、フランス政府宛の手紙の中で、インドシナの改革を提議している。彼は最近の爆弾事件に関する責任を逃れたいようだ。ゲスデ氏はその資料を受取って、チンとトアンに陳述書を書くことを要求した。

トアンは今年7月1日に南圻を離れ、ベトナムの革命家を探すために香港に行った。ふさわしい人物がいたら香港に留まり、もし本心から改革を望む者がいないのであれば、南圻に帰る予定であった。中国に行ったとき維新会の目標を見て、祖国に益がないと思い、クオンデと議論した。クオンデは、パリに行ってインドシナ政策の改革を求めることに同意した。もし満足できれば、帰国するつもりだった。

トアンによれば、クオンデはドイツの船に乗った。イタリアのゲネス港で、クオンデは、欠席裁判で自分に死刑判決が出たことを知り、フランスに逮捕されることを恐れてドイツに直行し、トアンをパリに行かせた。

トアンは秘密を守るため、クオンデがドイツのどこの町にいるのか明かさなかった。トアンのゲスデ氏との10日前の面会で、彼は仏越間の衝突を終わらせるため、協約を交渉しなおすためにフランスに来たと自称した。また革命軍が(アンナン人の)信任を得るため、総督府のような大きな建物を破壊するつもりであると言った。ベルリンで3つの党に会うつもりだとも言った。

ファン・チュウ・チンはゲスデ氏に、クオンデとトアンとは面識が無いと言った。しかし、クオンデがファン・チュウ・チンに出した手紙によれば、面識が無いとはとても信じがたい(後略)。

確かにチンは東遊運動期に来日して、ファン・ボイ・チャウやクオンデとも面会している。ただし、チャウとチンはベトナムの独立後の政体につ

いて意見が一致しなかった（白石 1993：249-251）。このような経緯や、「お尋ね者」であるクオンデとの面識の事実を、チンは認めたくなかったのかもしれない。

クオンデのヨーロッパ行きに同行した者にはトアンだけではなく、ドオ・ヴァン・イー¹⁵⁾がいた。イーはミトで勉強していたが、香港に行き、クオンデと出会ってからはドイツの学校で学び、トアンやイギリスにいたジョセフ・タインとともにクオンデをヨーロッパに連れて行った。クオンデが1914年ヨーロッパを去ると、イーはパリにトアンを探しに行き、フランスの奨学金を受けて勉強した。チンは2人の愛国心を知ってつきあったという（Lê 2000: Quyên 72）。

しかし、そのような信頼関係が最初から築かれたわけではない。クオンデの回想記ではフランスの追及を恐れてイギリスのロンドンにいた頃、「チュオン・ズイ・トアンをファン・チュウ・チン氏と秘密に連絡するためにパリに行かせた（中略）トアンはパリに行き、チン氏を探し当てたが、氏は圖人（クオンデの自称）の派遣した者であると信じず、フランス人が動向を探るために送り込んできた者と思った。そこで、トアンを言葉巧みにフランス植民地省に連れて行った」（Cùròng Đê 1957: 86）。

つまり、クオンデは、チンが自分の手紙を持参したトアンを植民地省に連れて行って手紙を差し出したのは、フランス側の陰謀にだまされなかったためであったというのである。しかし、クオンデの手紙は本物であった。トゥー・チャンによれば、グエン・アイ・クォックはチンを告発したのはグエン・ニュー・チュイエンであると述べたと言う。チュイエンは聡明であったが「道を誤り、植民地省に買収されて、ファン・ヴァン・チュオンとチンの行動をスパイした。2人は逮捕された」（Thu' Trang 1983: 58）。その証拠として、トゥー・チャンは、チュイエン自身が逮捕された後の軍事裁判での証言を挙げている（Thu' Trang 1983: 59-62）。以下に、筆者が海外領土資料館で収集したチュイエンの予審調書を示す。

史料6 グエン・ニュー・チュイエン予審尋問調書¹⁶⁾

1915年4月8日

問：あなたはあなた自身が持っていた71号の手紙で、「状況ごとのすべての段階は、蜂起のための戦闘を援助するものであり、下部の別の文で「民が怒っていたら、蜂起を待つ必要はない。中国の清朝のようなことがおこる」（と言うが）、あなたはどのような蜂起を暗示したのか？

答：私が言いたかったのは、改革が実現できなかった時のアンナン人民の蜂起です。しかし逆の場合なら、蜂起は起きないでしょう。

問：一定の場合に、その蜂起はどのような形で起こるのか？ 目的は？
誰が指揮するのか？

答：蜂起の形式を知るのには私にはたいへん難しい、なぜなら私は指導者ではないからです。私はただその蜂起（が働きかける）目標は、改革の実行を要求した民衆だろうと推定できるだけです。フランスに詳しくないので、誰が指導するかについては答えられません。

問：反乱分子の組織の蜂起はどのようになるはずだったのか？ あなたは一つの強国—中国のような—あなたが手紙の中で何度も言っているような国の精神的、財政的、軍事的な援助が得られると考えるのか？

答：私はアンナン人民の蜂起がおきたら、中国が精神的、財政的、軍事的な援助をするのは可能だと思います。

問：どんな根拠があって、そのような意見が持てるのか？

答：私はファン・ヴァン・チュオンが中国に行く予定であることを、彼の家でも、ファン・チュウ・チンの所でも、あるいは親愛会の会合でもそのように聞きました。

問：ファン・ヴァン・チュオンは何の目的で中国に行くのか？

答：たぶん中国南部の総鎮に、アンナン人民の蜂起を援助してくれるのを頼むのが目的です。

問：ファン・ヴァン・チュオンは一人で行動するのか？ 誰かと討論する

のか？

答：目的や方法について、チンとチュオンの間の合意があります。インドシナの各支部でもそうです。私の言に逆って開かれた3月27日（の会合では）、私は、ファン・チュウ・チンの家に学生が誘い込まれ、ともに蜂起の行動について研究するのを見ました。

問：あなたの意見では、あなたのフランスにいる同胞に、最近インドシナで起こった事変について何か連絡はあったか？

答：はい。それらの事案がおきたのは、ファン・ヴァン・チュオンとファン・チュウ・チンの扇動によるものです。

問：調査の結果、蜂起の煽動者はドイツの財政支援を受ける予定だった。このことについて詳細を知っているか？

答：ただの予定だと知っていました。蜂起が起きて初めて、革命家たちはドイツの金を受け取ります。方法についてはよく知りませんが、しかしそれが行われることは知っていました。なぜならファン・チュウ・チンが、そのことについての手紙の束を見せてくれましたから。それらを私は破棄してしまいました。

問：あなたはこの問題について、それ以上くわしく知っているか？

答：私は、ファン・チュウ・チンがドイツの援助した金を受け取ったこと、ドイツ政府が（チンらの行動）を認めた事を知っています。この金はクオンデの部下であるチュオン・ズイ・トアンとドオ・ヴァン・イーが持ってきました（中略）。トアンとイーは私に、クオンデがドイツ政府と連絡していると言いました（後略）。

このように、チュイエンは、ファン・チュウ・チンやクオンデがドイツの援助を受けていたとする。チンについての情報をフランス植民地省に知らせていたのがチュイエンであったことは、チンにとって意外であったろう。なぜなら、以下のような証言があるからである。

史料7 証人カオ・ダック・ミンの口述調書¹⁷⁾

1915年5月22日14時、書記カロンとフォコンブルが担当。以下はカオ・ダック・ミンの答え。27歳。東方言語学校の助手で、現在は外人部隊第一部隊の兵士で、コート・ドーの別働隊に派遣されている。

以前から私はトアンとイーとは親しくない。2年ほど前、ファン・チュウ・チンが私の家に来たとき、チュオン・ズイ・トアンを連れてきた。チンはトアンが持ってきたクオンデの一通の手紙を受け取り、私にプレートル氏の所に持っていくように要求した。なぜなら、チンはクオンデと関係を持っていることを言いたくなかったからである。プレートル氏と面識がなかったので、私はチンに、私と一緒に植民地省に行くことを提案した。私たちはゲステ氏に会った。しばらくして、私は植民地省のためにクオンデの手紙を翻訳するように頼んだ。その後、私はトアンがパリにいる時に彼に会った。数ヶ月後、ドー・ヴァン・イーがブリュッセルからパリに来たが、クオンデに放っておかれたので金を持っていなかった。トアンが彼を私に紹介した。ファン・チュウ・チンは彼をカブス氏に紹介したようである。私は彼に私の家で会った。彼はそこで、送られてきた手紙を受け取った。その後、トアンとイーは奨学金を得てパリを去った。

問：あなたはトアンとイーのクオンデとの関係を知っているか？

答：私はイーの役割について何も知りません。トアンは私に、彼は南圻の新聞の主筆をしていたと語りました。彼はクオンデに、同胞が寄付した金を渡すことができました。クオンデは彼に通訳をさせ、欧州に連れてきました。私は、彼がフランスに来た後もクオンデと関係があるか知りません。しかし彼はドイツから金を受け取ることが出来たので、私はその金はクオンデのものだと思います。

問：その金は多額なのか？

答：ある時、彼が1200か1300フラン受け取っているのを知ることが出来

ました。

問：その金は何に使うのか？

答：彼は自分のために使うと言いました。

問：あなたはグエン・ニュー・チュイエンの「ファン・チュウ・チンはイーとトアンを通して金を受け取る」という証言をどう思うか？

答：知りません。ファン・チュウ・チンは私を信頼していません、なので私には真実を語りません。しかし、チュイエンの証言が正確でも驚きません。

問：しかし、チュイエンは、ファン・チュウ・チンは受け取った金を宣伝に使うだけだと言っている。

答：私は知りませんが、そのことについては驚きません。外見は正直でもファン・チュウ・チンの態度は疑わしいからです。

問：あなたは、クオンデが外国の手先とともに中国やベルリンに行って何を企んでいると思うか？

答：インドシナでは、クオンデは常に中国の権力者に助けられていると信じられています。私は彼がベルリンで何をしているか全く知りませんが、中国でドイツ人と関係があったかも知れません。

問：あなたは、クオンデがファン・チュウ・チンをフランス当局者へのスポークスマンに選んだと思うか？

答：ファン・チュウ・チンは自分を、注目され、植民地省に対して最も影響がある人間だと自任しています。

問：ファン・チュウ・チンとクオンデは、トアンの活動以前から知り合っていたか？

答：私は知りませんが、たぶんファン・チュウ・チンはクオンデが日本にいた時知り合ったと思います。

問：あなたは、ヴォ・クアン・ギューという中国人がファン・ヴァン・チュオンと関係があり、グエン・ニュー・チュイエンによれば、革命の

ために中国人との仲介をしていることを知っているか？

答：そのことについて私は何も知りません。さらに、ファン・ヴァン・チュオンはファン・チュウ・チンと同様、私に疑いの目を向け、真実は何も話しません。

問：ファン・ヴァン・チュオンが頻繁にロンドンに行くことや、その目的が何だか知っているか？

答：私がパリに来る前、1913年2月、ファン・ヴァン・チュオンはロンドンに行きましたが、目的も、どのように行ったのかも私は知りません。私がパリに来てから、彼がロンドンに行ったかどうかは知りません。

問：ファン・ヴァン・チュオンの役割について、あなたは何か意見があるか？

答：彼だけに関して言えば、ファン・チュウ・チンとお互いの見解を深く理解し合っていたのでしょう。しかし、私はこの点について具体的には知りません。ファン・ヴァン・チュオンは、親しくない人には心情をあかしません。

問：あなたはパリにいるアンナン人のなかでの、ファン・チュウ・チンとファン・ヴァン・チュオンの役割を知っているか？

答：ファン・ヴァン・チュオンについては何も知りません。しかしファン・チュウ・チンは、以前は同胞の前では植民地省に影響があるように振舞っていました。私は、人々が彼は（原注一字不明）フランス団結委員会の保護下であって、パリに来たアンナン青年を面倒を良く見ていることを知っています。知っているのはそれだけで、この点について具体的なことは知りません。

問：ファン・チュウ・チンのグエン・ニュー・チュイエンに対する関係は、どのようなものか？

答：彼らの関係はとても良い。ファン・チュウ・チンがどこに行くにも、

(68)

グエン・ニュー・チュイエンが通訳をしています。

問：彼等は同じ政治的意見を持っているのか？

答：私は知りません。

問：あなたは、我々があなたに見せたファン・チュウ・チンに送られた6号書簡についてどう思うか？

答：この手紙はたぶん、タット・タイン¹⁸⁾という名の者がファン・チュウ・チンに対して書いた手紙に答えたものでしょう。同胞の苦しみに嘆息した後、タット・タインはファン・チュウ・チンの事業を継続することを保証したのです。

問：あなたはファン・チュウ・チンが、(アンナン)国内の同胞に影響を持っているか知っているか？

答：私には答えられません。なぜなら、私は北圻にいて、彼は中圻にいるからです。もし彼が影響力を持っていても、中圻だけでしょう。

問：あなたは、クオンデの書簡を植民地省に渡す行為が、ファン・チュウ・チンの使者が政府に忠誠を誓う心情の証しだと思うか？

答：私はこのことについて何も肯定できませんが、既に述べたように光明正大な外見をしていても、ファン・チュウ・チンの態度は疑わしいと思います。

記録を読み直した後、カロン、通訳、書記とカオ・ダック・ミンが署名

チンはチュイエンを信頼し、どこへ行くにもチュイエンを通訳として連れて行った。そのチュイエンが、チンの情報をフランス当局に知らせていた。最も親しい者に、チンは裏切られていたのである。また、ミンの証言は、チュイエンのそれを裏付けるものであった。

しかし、フランス当局は、チュイエンの証言に信憑性が無いと判断するに至った。この証言のわずか16日後、チュイエンは精神病院に入院し、「精神が衰弱し、幻覚があり、食事も話すこともできず、落ち着きが無い」

と報告され、精神に病を抱えていると判断される (Lê 2000: Quyên 4, 120-121)。チュイエンの証言には証拠としての価値が無いと判断され、チンとチュオンは釈放される (Lê 2000: Quyên 4, 8)。

3. クオンデのサローへの手紙

前述のとおり、トアンはクオンデのチンへの手紙と、フランス政府に対する手紙の2通をパリに持参し、チンは2通とも植民地省に提出した。筆者はその手紙を発見できなかったが、チュオン・ビュー・ラムが英語に翻訳した (Truong 2000: 178-185)、クオンデが1913年12月にサローに書いた手紙に、当時のクオンデの考えが反映されているものと考え、この手紙の大意を紹介する。

史料9 クオンデのサローへの手紙¹⁹⁾

1913年12月1日

インドシナ総督 アルベール・サロー閣下

昨年の5月、私はアム・ヴォという私の支持者から、一通の手紙を受取りました。その手紙は閣下を最も栄えある言葉、「二度とない天分を持った時代の英雄」として紹介していました。さらに手紙の筆者は自由の党の指導者として、あなたは人間の徳に心を寄せ続けていると書いていました。あなたがインドシナを統治するために来られた時、あなたは、ベトナムの民が不幸にも、不実で無法なトラブル・メーカーの全体支配にあることを発見しました。

あなたは民の福祉の向上をさせる改革の実施を準備しました。私はそのことをたいへん幸福に感じ、心底あなたの政策を支持するものであります。なぜなら、あなたのような類まれなる天分を持った方に、私の民が統治されるからです。夢のような植民地行政が、芸術的と言って良い

くらいに提示されたからです。

過去十年かそれ以上、私は昼夜瞑想して、天分を持った方に出会うことが無かったベトナムの民を哀れむことをやめることはありませんでした。国を守る勇気のある者がいない、それは理解しうる事実です。しかし、民が政府に反乱を起こすようになるのを見ることもできないのはなぜでしょう？ ベトナム人を熱烈に愛する者が見られないのは理解しうる事実です。しかし、なぜフランスの大義名分を完全に支持するような者もないのはなぜでしょう？ 人間のために戦う者が見られないのは理解しうる事実です。しかし、なぜ、人間のために戦うような者も見られないのはなぜでしょう？ だからこそ民はますます無知になり、邪悪になり、惨めになり、頭を土の上に挙げることもすらできない程になりました。もし私が述べたような人がベトナムに来るなら、現状維持を頑強に執着する者の代わりに、インドシナが調和するように植民地政策を修正するでしょう。

実際、もし植民地政府が現状維持を続けた場合には、民はとても無知で政府によって行われている手段に関しても疑うことさえしようとはしなかったでしょう。そのような国家の状態は結果として政府にとって迷惑になったでしょう、民は政府を信頼せず、政府の言うことを聞こうとはせず、その命令を十分に聞こうとはしないでしょうから。民が政府を信頼せず、従わないなら、政府はどうやってその仕事を行うことが可能でしょうか？ 無知な民はトラブル・メーカーの言うことを聞こうとしません。事実、最近の投毒事件、反乱、爆弾事件のようなすべての事件は、愚か者によって引き起こされたのではないのでしょうか？ 更に、そのような危機が起こったら、すぐに政府の役人が沈静化させるのは困難です。政府の役人が愚か者をそのままにしておけば、民の惨めさを減らすことはできません。そして、もし民が惨めなら、政府はどこに公共事業を行う歳入を見つかるのでしょうか？ 惨めさのせいで、民は盗賊や海

賊になり、国内に不安定をもたらすのです。そのような状況のもとでは、政府はどうやって外交に注意を払うことができるでしょうか？

私たちが新しい政策を実行すれば、法務と教育に変化が訪れるのは疑う余地がありません。法を近代化すれば、文明化された法のみが適用されるのは確実で、野蛮な法を行う理由は完全になくなります。法が近代化されれば、高貴な者もそうでない者も、金持ちも貧乏人も、知識人であろうが、職人・商人・農民であろうが、すべてが平等に扱われるでしょう。金持ちは自分の利益のために投資を考え、才能がある者は興行や商業を起業するでしょう。高貴な者はそうでないものを教え導き、金持ちは貧乏人を助け、賢人は愚者を指導し、全てが生活と幸福を享受するためにお互いに助け合うでしょう。

もし教育体系が変われば、例えば鉱業、電気、薬学、文学、工業、商業、文学、林業に新しい方法が行われるでしょう。政府から科学を学ぶことにより、民は生活水準を上げるために新しい方法を活用するでしょう。

あなたのような方に今、インドシナを治めていただくのは何という特権なのでしょう！ 今から 2500 万人のベトナム人が他の人々と平等を享受すれば、1500 万人のフランス市民も恐怖や紛争なしに生活することができ、インドシナ植民地が紛争の恐怖無しに過ごすことができ永遠に安定するなら、それはあなたのおかげです。そのことを覚えていただきたいのです。

我々はフランスにもう反抗しません、過去にフランスに対して反乱を起こしたのは、植民地政府がベトナムの民に残酷に対処したからでした。もし反抗しなければ、民は生き残ることができたでしょうか。だから私たちはこのように行動したのです。

あなたは現地人の関心事をご覧になりました。いま、あなたは彼等を文明化する準備ができておられます、私たちは自らを傷つけるどんな理

由もないでしょう。

今回、私はヨーロッパに来て、パリに行く2つの使命を固めました。フランス政府の大臣たちに会って、インドシナの全ての状況を明らかにすること、そしてあなたが行ってきた事業を続けるために、あなたのインドシナでの在任期間の延長を要求することです。不幸にも、私はここについたと同時に、インドシナ植民地政府が国の平穏を維持するために、人間性や関心を持つこと無しに、より多くのベトナム人を逮捕することでしか、植民地の安定性を証明することに興味が無いということを新聞で読みました。インドシナ政府がそのように振舞うなら、私が多くの言葉を費やしても全ては無駄になるでしょう。

さらに、もし私がパリに着いたと同時に、インドシナ政府がベトナムの民への迫害を始めるなら、私の方策は終わり、私がパリにいることはフランスに対する降伏の意思を意味するでしょう。それゆえに私はパリに行くよりドイツに留まったのです。私はパリのフランスの大臣たちに会う勇気はないけれど、私があなたを招待するという望みは長いこと消えていません。それゆえ、私はあなたに2回目のインドシナへの帰還を望むということを言いたいのです。そしてもしあなたがインドシナへ戻るなら、以下のアイディアをインドシナの公僕に広めることを乞うのです。

一民に自分の意志で政府に奉仕するように振舞うほうが有利です。なぜなら、現在、政府は給料を与えているスパイのコストのみを計算しなければならぬので、何も有効な結果を生むことなく、政府は正しい道からはずれています。

一民に平静でいる以外のことを考えさせず、自分の仕事をやり、犯罪に関与しないことを考えさせるほうが有利です。もし政府が効率を考えて、可能な限り多くの民を逮捕することのみを考えているなら、全て悪い結果しか伴わないでしょう。

一政府は形式的には寛容で、実質的には厳しいほうが有利です。現在すでに悪くなっている状況が更に悪くなりますから。

このようにして、クオンデはアルベール・サローのインドシナ総督としての再任と、彼の改革政策に期待をかけていることを述べた。しかし、そのことはまた、現在のフランスのインドシナ植民地政策の現状に対する失望を浮き彫りにさせる形になっており、植民地政庁の官吏の振る舞いや、財政に提案をするという形で現状批判をしているのである。手紙の後半は、同じ植民地を持つ帝国主義国家イギリスとの比較からはじまる。

植民地行政の点では、イギリスがフランスより優れています。例えばオーストラリアでは、イギリス政府は、植民地政府の幸福がオーストラリアの国民の幸福に関係していると説明しています。ですから、政府に敵対する考えを持つ者がいれば、民は政府に指示されなくても、それらを反乱者と見て弾圧します。

さらに論点を箇条書きにして、クオンデはこのように主張する。

- ① スパイを送るのに金を払うのは、正道から外れている。以前から、政府は地方にスパイの軍隊を送った。政府は反抗する者の扱いを間違えた。代わりに、同胞をスパイするエージェントを送った。それはナンセンスである。食べ物に事欠くので、エージェントはフランスに奉仕するにすぎない。彼らが最後に報告を送る際に、たくさんの賄賂をもらったなら、彼等はあわててあなたを裏切るだろう。彼等は同胞を裏切るのが嫌だから。どうして彼等は、政府によって与えられた同胞を支配するという罪に服従できるだろうか？ 彼等は、あなたにうその情報を提供している。
- ② イギリス植民地のオーストラリアとカナダは、工業・福祉・軍事で

イギリスと同じレベルにあり、彼等はそれらの産業に集中していて、革命や自治の要求以外に発展の最良の条件は何かを考えている。イギリスも兵士を増やしたり、スパイを雇う必要が無い。植民地は平静で、行政にはしっかりとした基盤がある。

- ③ (翻ってインドシナでは)、植民地政府の効率性を証明するために、可能なかぎりの民を逮捕しているのはデータを誤解しているに等しい。最近革命家の逮捕の無い月はなく、愛国者の国外追放の無い年はない。追放や斬首では革命家の数は減らず、日に日に増えてさえいる。
- ④ 形式的実質的寛容が必要である。革命家は、政府が民に誤って対処すると、支持者をリクルートする豊かな基盤を与える。我々が専制君主のような体制のもとで暮していることは、逃れようのない事実である。しかし、もし我々が行動しないなら、民は不幸であり、それで我々は、我々に意志に反して活動家になるのだ。

そしてクオンデは以下のように手紙を結ぶ。

数年以上、私はいつもインドシナの政府と話したいと思ってきました。しかし、その目的に対し何の成果もあげることができませんでした。なぜなら、誰にも会えなかったからです。今日、私は価値ある人と会うことを説得され、私の心をあなたに開きます。あなたに私がこうするのは、民のためであって、クオンデ個人の利益のためでないと感じていただきたいのです。民を統治することは病人を治療することに似ています。医者は病人の原因や起源を調べます。医者は適切な治療法を探すと同時に、患者の体質を学びます。国を良く治めるために、良い統治者は民の感情・慣習・要求を政策実行前に調べて、状況に応じて、リベラルにしたり、厳しくしたりします。統治者は、民の文明の程度や外的な状況に従って、政策を調整します。確かに困窮した民を荒々しく扱っても、その国自身

のためになることはなく、それは良い政策ではありません。

政府は過去数年に渡って、ベトナムの民にとっても厳しい政策を取ってきました、なぜなら、ベトナムが独立するための手段を求めて、外国と接触したからです。このような方法は数年前には適切でしたが、今日では不条理です。なぜなら、ベトナムの民は独立を達成するのは不可能だと見て、もはや独立に関して考えていないからです。私たちはよりリベラルな政策を乞うているのみです。(植民地政府が) 私たちの適度な要求を満たすのは今ではないでしょうか？ 私たちの嘆願は適法ではないのですか？私は個人的には、これからの数年の間にあなたがベトナム人の条件を向上させなかったら、アンナンとトンキンの民は疑いも無く、心に記憶されている過去と同じ出来事を目撃するでしょう。反対に、政府が民の苦しみを緩和することに挑戦すれば、政府は多くの利益を得るでしょう。ベトナム人がフランスに感謝する 때가遅くなるのが、恐れられます。

私はあなたのご高見に奉仕し、ここに親愛の情をもって、私の示したいくつかのアイデアを試みられることを名誉と考えております。

私はあなたのご長寿を願って筆を置きます。また、あなたにフランスの繁栄という最良の望みをお送りします。

4. 欧州滞在期のクオンデの思想と行動

クオンデは当初フランスを目指していたが、インドシナ総督サロー暗殺未遂事件で、自らに欠席裁判で死刑が宣告されたのを知り、逮捕を恐れて目的地をドイツに替えたという。しかし筆者は、クオンデが最初からフランスのみを目指していた、つまりはフランスへの抵抗路線とは異なる「仏越提携」路線のみが彼の目標だったとは思えない。筆者は、クオンデは最初から、フランスとの交渉と、ドイツの援助を受けてフランスに軍事的な

ものも含めて圧力をかけるという選択の幅を持って行動していたのではないかと考える。そのことは、チン宛の手紙の日付が1913年9月初旬になっていることでもわかる。クオンデがもしフランスとの何らかの交渉を視野に入れていなかったら、この時期にチンにフランス政府やフランス人への仲介を依頼するような手紙を書くことは無いはずである。ドイツ政府に接触を試みたクオンデが、誰にも会うことができず、イギリスに向かうのは1913年10月である。

こうして、クオンデがフランスとも交渉の余地を残そうとしたのは、前述の通り、自ら援助を乞いに行った中国への強い警戒感である。漢の武帝以来の1000年の支配から脱した後も、ベトナムの王朝は歴代中国王朝の侵略を受けてきた。この記憶と圧倒的な国力の差がクオンデに警戒感を持たせた原因であろう。結果的に中国の援助も得られず、クオンデは再び日本に戻り、以後1951年に死去するまで日本の庇護の下にあった。しかし、必ずしも「日本一辺倒」であったわけではない。この点については、稿を改めたい。

[注]

- 1) クオンデは欧州退去後、まず中国に向かうが、第一次世界大戦下で日本政府から対華21か条の要求を突きつけられて対応に追われていた袁世凱には会見すらできず、結局、日本へ舞い戻ることになった。
- 2) チュオンは、現在のハノイ市中心部から10kmの距離ドンガックにあり、王朝時代には科挙において進士・挙人などを輩出した東鄂社(Xã Đông Ngạc)で1878年に生まれた。フランス語通訳学校を卒業した後トンキン理事長官府に勤めた。1910年に渡仏し、パリの東洋言語学校で教える傍ら法律を学び、パリの控訴院で最初のベトナム人裁判官となり、後に弁護士に転身し、フランス国籍も取得した。チンの渡仏後は、2人で「同胞親愛会」を設立するなど行動を共にし、チンとともに1914年9月に逮捕され、翌年の7月まで獄中にあった(Lê 2000 Quyên 3: 133-134)。出獄後チュオ

ンとチンは、パリで「アンナン愛国者協会 (Association des Patriotes Annamites)」を結成した。民族主義者としては未だ無名であったグエン・アイ・クオックが同協会の書記に就任した。1919年、クオックの名でパリ講和会議に対し「アンナン人の要求」が出されたが、チュオンはこの「要求」の共同執筆者であるとも、単にクオックの拙いフランス語を添削しただけであるとも言われている (Duiker 2000: 58-59)。いずれにせよ、チンとともに、クオックとも密接な関係を持っていた。1923年にクオックがソ連に渡ると、チュオンも同年中にベトナムに帰国した (Lê 2000 *quyển* 3: 134)。その後はサイゴンで『アンナン (L'Annam)』紙の主筆となり、『共産党宣言』を翻訳して掲載した。1933年サイゴンで死去した (Nguyễn Q. Thắng 1992: 807)。

- 3) (Lê 2000 *Quyển* 4: 38-39)。
- 4) (Lê 2000: *Quyển* 4. 40-43)。
- 5) フランス植民地当局によるアルコールの専売は、植民地財政の歳入確保手段として重要視された。コーシナでは1860年代からおこなわれていたが、1897年には塩の専売とともに全国的制度として確立された。アルコールは農閑期の農民にとって現金収入源であり、アルコールの製造は、これも農民にとって現金獲得手段である養豚にも密接に結びついていた。しかし北部のトンキンではフランスによる専売制度によって、農村部の在来蒸留業は壊滅した。また密造に対しては、厳しい取り締まりがおこなわれた。機動部隊が農村にやってきて、密造者を告発するようにむらびとに強制し、人々は逮捕と虐待に怯えた (Broucheux and Hémery 2009 [2001]: 93-94) という。にもかかわらず、専売化当初、植民地当局は期待した売上額を確保できなかった。価格が高く、農民の嗜好に合わない専売酒は好まれず、密造者は後を絶たなかった (Lương 2010: 46)。そこで、村落ごとにアルコール購入量のノルマが設定された。1907年に売り上げが前年より25%落ちていたフート省では、省のフランス人公使 (Résident) が、村の成人男性数に基づいてアルコールを強制的に消費させる制度を作り、村ごとに富裕な村人を選んで、政府が作ったアルコールの販売管理をさせた。その結果、1911年の第一四半期には、売り上げが1906年より50%増えた (Lương 2010: 46-47)。阿片・塩とともに専売品として植民地財政に安定をもたらしたが、ベトナム人には大きな負担であり、1933年にフランス植民地当局はアルコール専売を廃止した (Broucheux and Hémery 2009 [2001]: 94)。
- 6) 阮朝第4代皇帝 (1829-1883。在位 1848-1883) 嗣徳帝の墓は、1913年に掘り返された。金銀、宝物を得るためだったと言われており、フランスへの反発が高まった。チンはこの事件を、同年のサロー暗殺未遂事件、タ

イグエン反乱事件と同等の重大なものと考え、フランスの新聞に抗議の投稿をしている。

- 7) 注5のアルコールよりも、植民地財政がさらに大きく依存していたのが阿片である。1864年から1881年までの間、コーチシナ政庁の歳入に占める阿片販売額の割合は18-23%であり、1899年から1922年には植民地一般予算のための歳入の平均20%を占めた。20世紀初めから、阿片禁止のためのキャンペーンや国際会議がおこなわれるようになったが、植民地当局は阿片専売を維持し続け、1950年にフランスが国連の麻薬協定を批准して廃止された(Broucheux and Hémery 2009 [2001]: 93-95)。
- 8) チュオン・ズイ・トアンは、1885年に南圻コーチシナのヴィンロン省で生まれた。サイゴンで学んだあと、プノンペンで植民地官吏になるが、ベトナムに帰って、維新会や東京義塾の影響を受けて、南圻で同様の運動を展開したミン・タン会(Hội Minh Tân 明新会)会長であったチャン・チャイン・チェウ(Trần Chánh Triêu), 別名ジルベール・シエウ(Gilbert Chiêu)が主筆を務めていたクオック・グー新聞『六省新聞(Lục Tỉnh Tân Văn)』の編集に参加する。フランス語に堪能であったのでクオンデに見込まれ、ドー・ヴァン・イーらとともに、クオンデの通訳兼秘書として渡欧し、パリに赴く。1915年に仏当局に逮捕される。出獄後に帰国して、ジャーナリストやカイルオン劇の脚本家・演出家として名をなす。抗仏戦期から1957年に死去するまで、サイゴンに在住した(Lê 2000 quyển 4: 141-142; Sơn Nam 1971: 101-102, 148)。1908年にシエウは反乱準備容疑で逮捕され主筆の座を降りるが、トアンがその代りを務めたか、筆者は未確認である。
- 9) CAOM. SPCE 357.
- 10) チンの号。
- 11) フィリピンは、1898年にスペイン領からアメリカ領になった。アギナルドラがアメリカの支配に抵抗したが、成功しなかった。東遊運動期にチャウが幸徳秋水らと組織した亞洲和親会にも、亡命フィリピン人民族主義者が加わっていた(白石 1993: 432-442)。クオンデは和親会の活動に直接参加していなかったが、フィリピンの状況を知り、関心を持っていたと考えられる。
- 12) (Lê 2000: Quyển 4. 67-69)。
- 13) (Lê 2000: Quyển 4. 70-72)。
- 14) ピエール・ゲスデは植民地省の官吏で、チンの動向を報告する任務を負っていた。
- 15) イーは1892年、南圻コーチシナのサデク省(当時)出身。サイゴンの師範学校で学ぶも、卒業後は職に就かず、維新運動に参加した(Nguyễn

- Q. Thắng 2006 : 620-621)。ドイツ語に堪能で、チュオン・ズイ・トアンとともにクオンデ訪欧に同行した。クオンデが欧州を離れた後、パリでファン・チュウ・チンらのグループに入る。1915年、チンの「サンテ監獄事件」に伴って逮捕・収監され、ベトナムに送還されカントーで軟禁生活を送った後、同地の印刷所の責任者となる。八月革命後にはベトナム民主共和国の国会代表に選ばれるが、抗仏戦期にはフランスに逮捕され、1948年になって釈放された。サイゴンで文学研究に携わり、1968年に同地で死去した (Lê 2000 : Quyển 4. 142; Nguyễn Q. Thắng 1999 [1992]: 206)。
- 16) SLOTFOM III/29. Proces Verbal d'Interrogation. Piece 56.
 17) SLOTFOM III/29, PIECE 56.
 18) グエン・タット・タインは、グエン・アイ・クオックの本名である。
 19) (Trương Bưu Lâm 2000 : 171-185)

引用文献

- Brocheux, Pierre and Hémely, Daniel
 2009 [2001] *Indochina- An Ambiguous Colonialization 1858-1954*.
 Los Angeles, London : University of California.
- Cường Đê (Tùng Lâm)
 1957 *Một Cuộc Đòi Cách Mệnh*. Sài Gòn: Tôn Thất Lê.
- Lê Thị Kinh
 2000 *Phan Châu Trinh Qua Những Tài Liệu Mới*. Đà Nẵng : Nhà Xuất Bản Đà Nẵng.
- Luong, Hy V.
 2006 *Tradition, Revolution, and Market Economy in A North Vietnamese Village, 1925-2006*. Honolulu : University of Hawai'i Press.
- Nguyễn Q. Thắng
 2006 *Phong Trào Duy Tân- Các Khuôn Mặt Tiêu Biểu*. Hà Nội : Nhà Xuất Bản Văn Hóa.
- Nguyễn Q. Thắng, Nguyễn Ba Thế
 1999 [1992] *Từ Điển Nhân Vật Lịch Sử Việt Nam*. TP. Hồ Chí Minh: Nhà Xuất Bản Văn Hóa.
- Sơn Nam
 1971 *Miền Nam Đầu Thế Kỷ XX. Thiên Địa Hội và Cuộc Minh Tân*.
 Sài Gòn : Phù Sa.
- Trần Mỹ Vân
 2005 *A Vietnamese Royal Exile in Japan. Prince Cường Đê (1882-*

1951). London, New York : Routedledge.

Thu Trang

1983 *Những Hoạt Động Phan Chu Trinh tại Paris*. Paris : Đông Nam Á.

Trương Bưu Lâm

2000 “Letter to Governer-General Albert Sarraut”. Trương Bưu Lâm. *Colonialism Experienced : Vietnamese Writings on Colonialism, 1900-1931*. Michigan : University of Michigan Press. 171-185.

宮沢千尋

2006 「再来日後のベトナム東遊運動盟主クオンデ侯をめぐる日仏植民地帝国の対応と取引」『ベトナムの社会と文化』5・6 合併号, 115-150。風響社。

白石昌也

1993 『ベトナム民族運動と日本・アジアファン・ボーイ・チャウの革命思想と対外認識』東京：巖南堂書店。